

## あゆみ

2024年  
復活祭号簡易版発行所  
カトリック高橋教会  
あゆみ編集委員会  
TEL042(592)2463キリストの復活は  
三位一体の働きです主任司祭 ホルヘ・マヌエル・  
マシアス・ラミレス

昨年の四旬節の「あゆみ」に「十字架はキリストの復活を表す」という説明を書きました。



私たちは、主日ミサの中で信仰宣言を唱える時に「御父・御子・聖霊、それぞれについて、信じます」と言いますが、これは、実際は「三位一体を信じます」と言っているのです。ところが、普通は、実際、このように考えていていません。このように考えていない理由は、御父・御子・聖霊という三つのペルソナそれぞれの働きは、それぞれ異なり、他のペルソナの働きとは別である、と考えているからです。

今年、キリストの復活に関わる三位一体の働きについて、理解を深めたいと思います。

キリストの受肉の神秘から昇天に至るまでの神秘には、御父と聖霊の働きが存在します。聖エフレン助祭は次のように三位一体の信仰を伝えていきます。「御父は産む、御子は御父の胸の中で生まれ、聖霊は御父と御子から出て、創造主である父は、無から世界を造りました。創造主である御子は、創造主である御父とともに、すべてのものに存在を与えました。聖霊は、弁護者で慈悲深く、聖霊を通して、存在したものの、これか

ら存在するものを、そして存在しているものすべてを、完成します。

御父は意志、御子はことば、そして聖霊は声です。三つの名前、一つの意志、一つの力です。(死者と三位一体についての歌E P174)。

ペルソナは三つですが、神は一つです。一つであるので、神のみによって決められた人類の救いを果たすために、三つのペルソナが別々に判断することはしません。「我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう」(創世記1、26)。この言葉が、三つのペルソナの意志は一つであること、力は一つであること、をあらわします。イエス自身、人類に対して神の愛と憐れみによってご計画された救いを実現するために、御心・意志は一つです。御子の次の言葉がこのことを示しています。「父よ、御心なら、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願いではなく、御心のままに行ってください。」(ルカ22、42)。

一方、マタイは27章46節に、イエスが、御父がご自分をお見捨てになった、あるいは、孤独、とお感じになったことをあらわすような、次の情景が描かれています。「三時ごろ、イエスは大声で叫ばれた。「エリ、エリ、レマ、サバクタニ。」これは、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか!」。

しかし、聖書に書かれているイエスの次のことばが、イエスが、最後に、御父のみ心を行うために、十字架上で自分のいのちを捧げる時に、イエスが再び、御父と結ばれていることを示しています。「イエスは大声で叫ばれた。「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます。」こう言って息を引き取られた」(ルカ23、46)。

三位一体の三つのペルソナの関係・つながりについて聖書の様々な箇所にも語られています。特にイエスがこの世におられた時にイエスの周りにいた人たちは御父の声を聞く体験をしました。聖霊が鳩の姿で現れた時です。御子がいる場に御父の声が開こえ、聖霊が鳩の姿であらわれました。御父・御子・聖霊が同時に同じ場に、人間が人間の持つ視聴覚で認識できる状態であらわれたのです。例えば、イエスの洗礼の聖書の箇所にも次のように描かれています。「『霊』が鳩のように御自分に降って来るのを、御覧になった。すると「あなたにはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」という声が天から聞こえた」(マルコ1、10、11)。「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者。これに聞け」という声が雲の中から聞こえた」(マタイ17、5)。

この二つの箇所について聖アウグスティヌスは次のように説明しま

す。「それは御父の声でしたが、御父と御子と聖霊は、その本質は、神聖の一体なので、その働きにおいて切り離すことができません。」(三位一体「4、7」)。確かに、三つのペルソナは独立してはたらくことができず、が、独立してはたらくのは、神の意志に従い、神の意志を実現するためです。「だからこそ、唯一の『霊』の働きであって、『霊』は望むままに、それを一人一人に分け与えてくださるのです。」(1コリント12・11)と書かれています。この霊は御父からも御子からも出るのです。霊は、はたらく時に、御父とも御子ともつながっています。この為、福音書(マルコ3・13、19、ルカ6・12、16、マタイ10・2、4)に、「『イエスはご自分で十二人の使徒を選ぶ』、という内容が書かれています。『ヨハネによる福音書』には、「あなたが与えてくださった人を、わたしは一人も失いませんでした」と書かれています。このことばで、イエスは使徒たちを御父からいただいたと語っています。ですから、イエスが弟子たちを選んだ時に弟子たちは既に御父とつながりがあり、三位一体の働きがあることをあらわしています。最後に、聖ルカが説明している「三位一体」と「復活」の関係をここに記します。「このイエスを神はお定め



になった計画により、あらかじめ存じのうえで、あなたがたに引き渡されたのですが、あなたがたは律法を知らない者たちの手を借りて、十字架につけて殺してしまつたのです。しかし、神はこのイエスを死の苦しみから解放して、復活させられました。イエスが死に支配されたままでおられるなどということは、ありえなかつたからです。」(使徒言行録2・23、24)。

ここに、唯一の神の働きが明らかにされています。唯一の神、一つの心、一つの力によって、人の子は苦しみを受け、死の三日目に復活することとは、神様のみ旨であったことを真に理解しましょう。

主のご復活、おめでとうございませ

## 教会委員会だより

教会委員会 委員長

今回は主に二〇二四年一月から三月までの教会委員会だよりを記載します。  
昨年十一月以来主任司祭の不在が続く教区本部の支援をいただきミサを行ってまいりました。事務局長の浦野神父様始め、イエズス会の司祭



説教中のアンドレア補佐司教様

の方々、二〇一六年から二〇一九年まで担任した主任司祭をしていただいたザビエル神父様、東京カトリック神学院院長の稲川圭三神父様、また司教叙階されたばかりのアンドレア補佐司教様等、大変お世話になりました。ありがとうございます。  
昨年の今頃は、未だ新型コロナウイルス感染症の心配が解消されていない時期でした。復活祭には新しいミサ曲を皆で歌おうと言うことで練習に励みました。コロナ禍で出来なかつたことが復活祭を皮切りに徐々に出来るようになることは喜びでもありました。

さて、今年は二月四日に信者総会を開催しました。通常ですと新しい教会委員会のご承認をいただくところですが、今回は異例ですが暫定的に継続をすることになりました。四月一四日に臨時の信者総会を開催したいと計画しています。

四月一日で主任司祭の異動があり、新たに八王子教会と兼務で、高木賢一主任司祭、熊坂直樹助任司祭が私達高幡教会の司牧をしていただくことになりました。

### ●信者総会について

二月四日に定例の信者総会を行いました。議事は全てご了解をいただきましたこと、感謝いたします。二〇二三年度はコロナ感染症も五類になり、教会活動の制限も徐々に緩和

されてきました。高幡教会でも奉納行列は未だ実施していませんが、その他は通常通りのミサになってきました。これは本当に嬉しいことです。  
但し、二〇二〇年春から始まったコロナウイルスの感染症もあり、教会に来られなくなった、特に車などの往復手段がない方々が中々教会に来ていただけないう状態が続いています。この方々のサポートが充分にとれず、これは、今後も続くことですので、教会委員会でも検討していきたいと思えます。

### ●二〇二四年姉妹教会交流礼拝について

二月二十五日(日)十四時から日本ホーリネス教団・由木教会で四年振りの対面での交流礼拝を行うことが出来ました。日本基督教団・永山教会と高幡教会の三教会・四十五名が集うことが出来ました。感謝です。

二〇二四年のキリスト教一致祈禱週間(一月十八日～二十五日)のテーマ「あなたの神である主を愛しなさい、また、隣人を自分のように愛しなさい」(ルカ10・27)で交流礼拝を行いました。式文の最後のページにこの交流礼拝の歴史が記載されています。概要は一九九二年十月四日(日)にペルー人の青年三名が由木教会を訪問されましたが、スペイン語が分からず、高幡教会にお連れし、高幡教会の信徒がお迎えしま

した。幸いスペイン語を話せるシスターが居てこの方々と良い交わりが出来ました。そして、当時の主任司祭コンスタン・ルイ神父様と初めて会いました。この交流礼拝の始まる発端の作られた瞬間です。それから脈々と今日まで続いています。

三人のペルー人の来訪を知った時、聖書にも三人の博士がイエス様を訪問するとか、アブラハムに三人の旅人が訪れることを思い出し、由木教会と永山教会に不思議な縁を感じました。

### ●洗礼志願式

三月三日四旬節第三主日に今年の復活祭で受洗希望者の一名の方の洗礼志願式がありました。

### ●黙想会

三月十日四旬節第四主日に黙想会が行われ、イエズス会の山中神父様に指導して頂きました。

### ●復活の主日

三月三十一日復活の主日は、ミサ後にパーティーを行います。同時に四月一日付けで関口教会の協力司祭として異動するホルへ神父様への感謝と送別会も兼ねて行います。

### ●能登半島地震支援金の報告

一月一日に起こった能登半島地震の支援金を二月二十七日にカリタスジャパンに送金しました。

## 姉妹教会交流会礼拝報告

教会委員会 渉外委員

二月二十五日、凍えるような雨の中、四年振りに対面での姉妹教会交流会礼拝が日本ホーリネス教団由木教会で行われました。

礼拝堂に入ると、グアダルーペのマリア様の御絵が飾られていました。東京都立大学に研究滞在中のメキシコ人のロス氏が持ってきて下さったものとのことでした。

今回の礼拝では「あなたの神である主を愛しなさい、また、隣人を自分のように愛しなさい」



姉妹教会交流会の様子

(ルカ 10:27)の主題の基、礼拝式文が司式者一に由木教会の小枝功牧師、司式者二に由木教会の小枝黎子牧師、司式者三に高幡教会のホルへ神父、司式者四の永山教会の小手川到牧師に依って読み上げられました。

また福音書朗読では『善きサマリア人のたとえ(ルカ 10:25-35)』を、永山教会の小手川到牧師が説教してくださいました。その後、各教会の今までの歩みと今後姉妹教会交流会の継続を願うとの話が小枝牧師よりありました。礼拝式の最後に江崎倫永子さんによる素晴らしいパイオリン演奏がありました。

この姉妹教会の歴史は一九九二年に由木教会の小枝牧師と高幡教会の当時主任司祭の故ルイ神父によって始められ、一九九四年には多摩ニュータウン教会の西田牧師、二〇〇〇年には日本基督教団永山教会が姉妹教会に加わり、二〇二四年までエキュメニカルな活動が続けられています。

今回の参加者は四十五名(由木教会二十三名、永山教会八名、高幡教会十四名)でした。

### 成人式のお祝い

一月十四日、成人式を迎えた二人が祝福を受けました。おめでとうございます。新成人に神様の導きが注がれますように。

### 教会学校の卒業式

三月十七日の主日ミサ後に教会学校の卒業式が行われ、ホルへ神父様から一名の方が祝福を受けました。

## コンスタン・ルイ神父の 墓参り報告

1961～1998 当教会の主任司祭を歴任

T・I

二〇二三年八月三十日から妻とフランスのルビユイの道を歩き、ピレネーを越え、バスでレオンに行き再出発し、十月十日スペインのサンチャゴ・デ・コンポステーラに到着しました。巡礼中、故 Constant Louis 神父 (1927.4.6 生～2015.8.30、八十八歳で帰天) の墓参りをして来ましたので報告します。



出発前に Missions étrangères de Paris (MEP、パリ外国宣教会) の日本管区に手紙とメールで詳細を問い合わせた。

・墓はパリミッシヨン会の家(引退神父の施設)にある。施設は昨年閉鎖され、現在の詳細は不明。

・住所は 45 Rue d'Escatalens, 82290 Montheton (モンブトン、エスカタラン通り四十五番地)。

・Toulouse (トゥルーズ) の北西の Montauban (モントバン) 駅から数百だがタクシーなら迷わない。

もし塀で囲まれた施設が無人で隣に家がなければ乗り越えてでも墓参りするかと覚悟を決めた。

「九月十四日 St-Martin の Gite (巡礼宿) を 7:30 朝もやの中出発、電車に間に合うように三時間近く休まず歩き Moissac 駅に着く。無人駅で自動販売機に戸惑うも何とか切符を購入し 10:59 発に乗り 11:23 モントバン (Montauban) 駅到着。

駅前のタクシーに乗り、上記の住所を見せると若い運転手は日本人が神父の墓参りをすると直ちに理解したようで親切な対応してくれた。

数分で広大な施設に到着し、運転手が呼び鈴を押し、若い管理人が建物から来て門を開けてくれた(タクシー代金は十五ユーロ)。彼から『警備会社から派遣されており、どの墓かまでは知らない』ので自由に探して

ほしい」と言われ、妻と分担して数百ある墓を調査した。かなりの時間をかけて探し、ようやく Constant Louis の名前を見つけたときは胸がいっぱいになり、直ちに妻を呼び二人で手を合わせた。(お祈りと天国の神父との会話はプライベートなので省略する)

昔は遺体を全て埋葬していたが、ここ数十年は火葬で一つの墓に四人が葬られていた。彼の墓碑は、昔からの墓碑と同じでシンブルそのものであり、宣教師に相応しい。

「Constant LOUIS RENNES 1927 JAPON 1965 †30.08.2015」

管理人の話では、すぐ近くにバス停があり駅まで行けるとのことだが便数少なく、タクシーを呼んでもらった。

Montauban 駅に戻る、Toulouse 発パリ行の高速電車(TGV)が停車していたので、パリから一泊二日で、うまくいけば日帰り、墓参りできるなど思った。

墓参りをその日に高幡教会の信徒たちや家族にラインとメールで写真付きで報告すると、全員からかなりの反響があり、だれからも愛されていたルイ神父の偉大さを再認識した。

以上報告します。もし墓参りされるときは、日本管区に最新情報を問い合わせてください。

四旬節一日黙想会（二月十日）

## ヨハネ福音書における

「上げられる」と

「イエス様の

「栄光」の「時」

イエズス会司祭 山中大樹 S.J.

## ■第一講話「人の子も上げられなければならぬ」(ヨハ8:14)

今日は午前十一時からと午後一時からの二回、お話をさせていただきますが、前半は四〇〜四五分を目安に、後半は二十五〜三〇分を目安にしてお話ししたいと思えます。それぞれ残った時間は、質問や黙想をする時間に充てていただければと思っています。

第一講話のために今日の福音朗読からテーマを選びたいと思います。取り上げるのは「モーセが荒野で蛇を上げたように、人の子も上げられなければならぬ」という箇所です。このイエス様の言葉に近づいてみますと、興味深いことがわかります。まず、この言葉は、前半と後半に分けられ、前半部分と後半部分が比較されていますよね。つまり、「モーセが荒野で蛇を上げた」と過去のことと、「人の子も上げられなければならない」という未来のことが対照されているのです。ところで、勘の良い方はお気づきだと思いますが、前半と後半部分には

文法的な違いがあります。つまり、前半部分では、「上げた」と動詞の能動形が使われていて、「モーセ」が「上げる」という行為の主体で、その対象は「蛇」です。しかし、後半部分では、「上げられる」と動詞の受動形が使われていて、「人の子」は「上げる」という行為の対象です。そして、受動形は行為の主体を書かなくても良いですし、書く場合は「〜によって」という形で表されますが、ここではそのような表現方法が使われていませんので、誰が人の子を上げるのか直接には分かりません。

では、「人の子」を上げるのは誰なのでしようか。それは「上げる」が何を意味するかによります。この点についてはすぐ後でお話ししますが、イエス様の「十字架」と関連しているとだけ今は申し上げておきたいと思えます。「上げる」ことが「十字架」と関係するのであれば、イエス様を「上げる」のは、まず、イエス様を十字架刑に定め、十字架につけた人たちだということになります。「まず」と申し上げたのは、『ヨハネ福音書』はなかなか一筋縄でいかない福音書だからです。「あの序文の神秘的なところがいい」と言う方にたくさん出会いましたし、みなさんの中にも『ヨハネ福音書』が好きという方はいらつしやるでしょう。しかし、神秘的な言葉というものは、その意味するところを完全に理解するのは難しいということですし、『ヨハネ福音書』に出てくる人物たちがイエス様を理解し損ねたことは皆さんご存知の

ところでしょう。彼らの誤解や無理解の原因は、イエス様の語り方には難解なところがあつて、例えば二重の意味をもつ言葉が使われることで、イエス様の意図することを捉え損なうということが起こるからなのです。たとえば、ニコデモ、サマリアの女といった人たちは、イエス様が二重の意味を持つ言葉を使うために、その話しておられることをすぐには理解できないのです。イエス様の言葉は、諦めずに問い続け、その意味を探し続けることが必要だということなのでしょう。

「人の子」が「上げられる」とイエス様がおつしやる場合にも、動詞の受動形が使われることで、誰が上げるのかということが隠されています。単純に考えればイエス様を十字架につけた人を指しているのですが、そこには別の意図があるようなのです。実は、聖書の中で動詞の受動形が使われる時には、往々にしてその受動形は神的受動形だと言われることがあります。つまり、受動形が使われている動詞が表す行為の主体は神であることが多々あるのです。みなさんご存知のように、ユダヤの文化では神様の名前を呼ぶことは忌避されていて、神の名の代わりに「主」とか「神」とか呼ぶのです。同様に、神様が誰かを・何かをどうしたこうしたと書くことを憚って、誰かが・何かはどうされたこうされたという受動形を使えば、神様に直接言及することを避けることができます。ですから、イエス様が「人の子が上げられる」と言

られる時、それは一人の子は神によって上げられる」と言わんとしていると考えられるのです。

さらに申しますと、イエス様の言葉は、正確には「上げられなければならない」と「ですよね。」「なければならぬ」と日本語に翻訳される言葉はギリシア語の *anai* (アイ) という言葉です。この言葉は「くしななければならない」とか

「くすることになっている」という意味を表しますので、神様が定められたことだ、神様の「意志だ」というニュアンスを含むことができる言葉なのです。たとえば、ルカ福音書なのですが、徴税人ザアカイという人がイエス様と出会った時に、イエス様は「今日は、ぜひあなたの家に泊まりたい」と言われますが、直訳すると、「今日はあなたの家に泊まらなければならぬ。」「泊まることになっている」であって、ザアカイさんの家にイエス様が泊まることは神様の「意志である」とイエス様は言っておられるのです。ですから、「あの人は罪深い男のところに行って、宿をとった」とイエス様を批判する人がいるのに対して、イエス様は「今日、救いがこの家を訪れた。この人もアブラハムの子なのだから。人の子は、失われたものを捜して救うために来たのである」と反論されるのです。イエス様の関心は、すべての人に神が望まれる救いを行き渡らせることなのです。ですから、「今日は、あなたの家に泊まらなければならぬ」、それが神のお望みだと言われ、救いがザアカイさんの家を

訪れます。不正があれば返済し、また財産を貧しい人たちに分けるというザアカイさんの回心の表明は、彼が救われた（この表現も神的受動形ですよね）、神によって救われたとザアカイさんが実感したことと裏付けています。『ヨハネ福音書』に戻りましょう。「一人の子も上げられなければならない」と言われていたが、わたしたちが確認してきたように、このイエス様の言葉は、「一人の子が上げられることを神様が望んでいる」とあるいは「神様がイエス様を上げることが望んでおられる」と理解することができているのです。

それではいよいよ「上げる」が何を意味するのかを考えてみましょう。「上げる」とか「上げられる」という言葉ですが、どのようなイメージをみなさんはお持ちでしょうか。おそらく、みなさんはポジティブなニュアンスをもった言葉として使われることが多いのではないかと思います。一般的には「あの人は会社で地位が上がった」だとか「株価が上がった」だとか、教会の中でも「彼は司教に上げられた」のように使ったりしますよね。何か昇進したり、上昇する、晴々しい、華やかな、栄光にあふれた道を進むことを表すために使われているようです。イエス様もこのような意味合いで「上げる」を使っているのでしょうか。はじめに、モーセの上げた蛇と人の子があげられることが対照されていることを思い起こすのが役立つと思います。モーセのこの逸話ですが、民21:1-6で

語られています。「なぜエジプトから導き上ったのか、十分な水もパンも食料もない」と不平を言ったイスラエルの民に対して神様が蛇を送ったこと、罪を認め、民がモーセに神様へのとりなしを願ったこと、神様の指示によって作られ、上げられた青銅の蛇を見上げた人々が救われたということが語られています。ですから、荒野の人々に救いをもたらした蛇と同じように、上げられた人の子を通して人々に救いが、命が与えられるのだとイエス様は言わんとしていることになりました。

ヨハ8:14で「上げる」と訳されている言葉ですが、ギリシア語の *anai* (ヒュブソオー) という動詞が使われています。この単語は3:14で二回使われる他に、『ヨハネ福音書』では、8:28、12:32、12:34で一回ずつ、合計五回使われています。それぞれの箇所でのように「上げる」が使われるのか確認したいのですが、8:28では「そこで、イエスは言われた。『あなたがたは、人の子を上げた時に初めて、わたしはある』ということ、また、わたしが、自分勝手には何もせず、ただ、父に教えられたとおりに話していることが分かるだろう」とあり、イエス様を上げた時に、人々は「わたしはある」ということがわかると言っておられます。「わたしはある」という表現の解釈は難しいのですが、出エ3:15で神様がモーセに示された名として理解するか、あるいは、より確実だと考えられるのは、ヨハ8:28は「わたしはある」と訳

しては、*わたしはそれである*と訳されるべきであって、つまり、イエス様は世の光であって、父のもとから来て、父のもとに行こうとされている方、「それ」なのだと言っておられると理解することです。つまり、イエス様を「上げる」ことによって、イエス様が父のもとから来て、父のもとに帰ろうとされる、世の光、父からの方、父の子だと理解できる、そのように *わたしは* は言っているのです。



講話中の山中神父様

ことは何か、随分と絞ることができそうです。最後に、12:34では『わたしたちは律法によって、メシアは永遠にいつもおられると聞いていました。それなのに、人の子は上げられなければならない、とどうして言われるのですか。その「人の子」とはだれのことですか』と人々がイエス様に尋ねています。当時のユダヤの人々が抱いていたメシアのイメージは、ユダヤの国や人々を異邦の支配者たちから解放する人物だったようです。ですから、メシアとも人の子とも呼ばれる人物が、彼らから離れ去るといことは理解できないのです。そして、「人の子」が誰なのか人々は分かっています。しかし、彼らの物分かりの悪さというのは、彼らが頑なだからとばかりは言えないようです。なぜなら、先ほども申し上げましたが、『ヨハネ福音書』ではイエス様はわかりづらい言葉遣いをする傾向があつて、ここでもそうなのです。たとえば、「人の子」というのは、「わたし」という人称代名詞の代わりに使えますし、「人間」をも意味することができまますし、「終末に現れる神からの救い手」といった意味をも持つことができるのです。簡単に「上げる」という言葉が『ヨハネ福音書』でどのように使われているかを見てきましたが、これを通して言えるのは、イエス様の「上げられる」というのはエルサレム入城の後のことで、それは父である神がお決めになったこと、それ

れを通してイエス様の本質、父から来られ、父のもとへと帰ろうとされている方であることが分かり、それを通して人々をご自分のもと、つまり、御父のもとへと引き寄せる、救いを与えること、そして、人々は理解できないようなことなのだと纏めることができそうです。では、「上げる」とは具体的に何を指すのでしょうか。もう既に、みなさん察しがついていると思うのですが、そうです、イエス様が十字架に上げられることです。ご昇天と考えられた方もいらっしゃるかもしれませんが、『ヨハネ福音書』は直接的にはイエス様の「ご昇天を語りません。確かに、ヨハネ12:34で、イエス様はマグダラのマリアに「わたしにすがりつくのはよしなさい。まだ父のもとに上っていないのだから」と「上る」という言葉で「ご昇天を語っています。しかし、20:17は *Gravitate* (アナパイノ) という別の動詞が使われています (20:20)。ですから、20:26で使われ、時間をかけてわたしたちが考えてきた、イエス様が来られた理由であり、わたしたちを含めたあらゆる人々の救いの源となる、イエス様が「上げられる」とことは、ご昇天ではなく十字架なのです。

さて、20:26でイエス様は、ご自分が十字架にかけられることは御父のご意志であつて、十字架を通してのみ人々に救いをもたらされると言われますが、このイエス様の言葉は公生活の初めの方に置かれている点にも注意が必要かもしれません。『ヨハネ福音書』の時系列に



従えば、洗礼者ヨハネを通して最初の弟子たちがイエス様に従い始め、カナの結婚式に参加し、過越祭のためにエルサレムに上った後の言葉なのです。そして、**9**章でエルサレムの神殿から商人たちを追出したことでイエス様は人々の憎悪と敵意を浴び始めます。イエス様は公生活のはじめから、人々の救いのためのご自分の死を覚悟し、その「時」に向かつて進んでいっておられたとさえ言うことができるかもしれません。

ここで、第一講話を終えたいのですが、第二講話の前にみなさんお一人お一人お時間をとって、神様がどれほどわたしを救いたいと望んでおられるか、神様がどれほどわたしを愛し、どれほどわたしと永遠に生きたいと思っておられるかを示すためにイエス様が歩まれたその歩みを祈りの中で感じたいと思います。十字架に上げられるという使命を受け止め、十字架に上られたイエス様の聖心、御ひとり子を十字架につけることをよしとされた、わたしたちを大切にされる御父の思いを感じられるようにと祈りたいと思います。十字架につけられたイエス様からわたしへの思いを聞くこと、つまり、イエス様はわたしをどのように見ておられるか、何をわたしに望んでおられるかをお尋ねしてみるのも良いかもしれません。

## ■第二講話「イエス様の栄光の時」

第一講話では「イエス様が上げられ

る」が何を意味するのかを考え、それが十字架に上げられることであり、そこに神様がわたしたちを救おうとする思い、そして御父の御心を実現する御子イエス様の決意といったことを確認しました。

第二講話では角度を変えてさらにお話を進めてみたいと思っております。と申しますのも、『ヨハネ福音書』のイエス様のご苦難とご死去の描き方と、共観福音書のそれとは随分と違うからです。簡潔に申しますと、共観福音書はイエス様の苦しみを強調していています。一つの例として、マルコとマタイですが、十字架上でのご死去前に「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」という詩編**137**の言葉をイエス様は語られます。苦しみを強調するという共観福音書の描き方の背後には、イザヤ**53:13-15**に特に顕著な「主の苦しむ僕」の姿があると理解できます。人々が神様に対して不忠実だから、主なる神は忠実な人物を選び、苦しみに至るまでの彼の忠実を通して、人々に救いがもたらされる、そのような主の苦しむ僕です。実際、旧約聖書には、例えば、モーセ、エリヤ、エレミヤなど、神に対して不忠実な人々に翻弄される、神に忠実な人物が現れます。イエス様はその系譜をひきつづも、その死はあらゆる人々への救いの源となったと共観福音書は考えているのです。

しかし、『ヨハネ福音書』での、イエス様のご受難からご死去の描き方は異

なります。例えば、ゲッセマネでイエス様が祈るといふ姿はありませんし、逮捕するためにやってきた人々とイエス様は堂々と渡り合い、弟子たちは散り散りに逃げるのではなく、イエス様が逃がすのです。そして、イエス様は総督ピラトの前でも力強く語り、ピラトの方がイエス様とユダヤの人々の間で怖気づいているかのようです。さらに、十字架の上では御母を弟子に託し、「渴く」「成し遂げられた」という言葉を語られます。これは共観福音書にはなく、『ヨハネ福音書』だけに見られる要素です。この全てを取り上げる時間はありませんので、イエス様の「渴く」というお言葉に注目してみたいと思います。これは一見すると、十字架上で血と汗を流し、渴いた喉を潤すために言われたとも考えられるのですが、ヨハネ**8:58**を思い起こすことが役立つと思います。「父がお与えになった杯は、飲むべきではないか」と、杯で象徴される苦難が、御父がお定めになったものであり、イエス様はそれを飲むことを、すでに決めておられるのです。そして、十字架上でイエス様の「渴く」という言葉は、死の瞬間に苦難の杯を飲み干すことを改めて宣言されるためだったと考えることができます。だからこそ、「渴く」に続く「成し遂げられた」という最後の言葉で、御父の定められたわざをすべてなし終えたと宣言なさるのです。

ですから、『ヨハネ福音書』が描くイエス様のご受難とご死去には、確かに暴

力や痛みや苦しきみといった要素があるのですが、それを超える、いわば御子としてわざを完成するイエス様の「栄光の「時」の出来事として描いているのです。

ここで、「時」「栄光」という言葉が『ヨハネ福音書』でどのように使われているかを確認してみたいと思います。まず、「時」と訳されるのは *καιρος* (ホーラ) というギリシア語なのですが、ヨハネでは二十六回使われています。一般的な「時間」や「時」の意味で使われることもありますが、注目したい用法があります。その第一は 2:4 で、カナの婚宴でイエス様が御母に「婦人よ、わたしとどんな関わりがあるのです。わたしの時はまだ来ていません」と言われた箇所ですが、イエス様は「わたしの「時」と、ご自身に定められた時があると語っておられます。

そして、7:30 では「人々はイエスを捕らえようとしたが、手をかける者はいなかった。イエスの時はまだ来ていなかったからである」、同様に 8:20 では「しかし、誰もイエスを捕らえなかった。イエスの時がまだ来ていなかったからである」とあります。イエス様には特定の時があるようですが、まだそれは来ていません。

ところが、最後のエルサレム入城の後 12:23, 27, 13:1, 16:25, 32, 17:1 では、「一人の子が栄光を受ける時が来た」「今、わたしは心騒ぐ。何と言おうか。」「父よ、わたしをこの時から救ってください

さい」と言おうか。しかし、わたしはまさにこの時のために来たのだ」「さて、過越祭の前のことである。イエスは、この世から父の元へと移るご自分の時が来たことを悟り、「もはやたとえによらず、はつきり父について知らせる時が来る」のだが、あなたがたが散らされて自分の家に帰ってしまい、わたしを一人きりにする時が来る。いや、すでに来ている。しかし、わたしはひとりではない。父が共にいてくださるからだ」「父よ、時がきました。あなたの子があなたの栄光を表すようになるために、子に栄光を与えてください」と言われます。つまり、イエス様のために御父が定めた時はエルサレムでの最後のわざ、ご受難とご死去、十字架に上ることなのです。そして、それはわたしたちの救いのためなのです。そうであれば、イエス様が十字架につくことは、神の栄光を表し、ご自身の栄光を表すいわば戴冠式です。ただ、イエス様の被られる冠は茨の冠です。

次に、「栄光」に関する言葉ですが、『ヨハネ福音書』では *δοξα* (ドクサ) という名詞が十九回、*deixazo* (ドクサゾー) という動詞が二十三回使われています。その詳細は省きますが、たとえば 12:44, 12:23, 28, 41, 13:31, 17:1, 4, 5, 23, 24 にあるように、イエス様の栄光はその死を通して表され、神の栄光はイエス様のわざの成就によって表されると語られています。

以上、わたしたちが見てきた「上げる」「時」「栄光」という言葉を合わせて考

えますと、十字架で象徴されるイエス様のご苦難とご死去は、もちろんそこには痛みや苦しきみがあり、悪や人々の罪があるのですが、その時こそ神様がイエス様を通して、痛みや苦しきみや悪や罪の中に生きるわたしたちに決定的に救いをお示しになる、生命への道をお開きになる時だと『ヨハネ福音書』は理解しています。極めてアイロニカルに、イエス様の十字架に上げられた時、死の時こそが、栄光の時だと描いています。

ここで、立ち止まってわたしたちを振り返ってみましょう。まず、わたしはイエス様の十字架をしつかり感じ、受け止めているでしょうか。十字架にわたしたちを愛し、救おうとされる神様の御心を感じているでしょうか。そして、わたし自身やわたしたちの教会や社会や世界が負っている十字架や苦難をどのように見ているでしょうか。もちろん、この世界に蔓延る悪や罪や痛みや苦しきみを美化してはいけません。そういったものはない方がいいし、私たちは悪や罪や痛みや苦しきみを乗り越えていく必要があります。しかし、十字架に付けられたイエス様は痛みや苦しきみを担う人々に常に寄り添っておられるのではないのでしょうか。神様のなさりかた、十字架のイエス様を見上げる時に、たとえ痛みや苦しきみがあってもわたしたちは逆説的に力強く生きていくことができるように思えます。

しばらくの間、十字架のイエス様の前で祈りましょう。✠